様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０６３３９・１９Ｋ２１４２２

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症のある夫と結婚した妻に対する地域住民のパブリックイメージ

研究課題名（英文）Public image of the spouses of people with autism spectrum disorders among community residents

研究代表者
出口　奈緒子（Deguchi, Naoko）

筑波大学・医学医療系・助教

研究者番号：２０８２４２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、自閉スペクトラム症（以下ASD）のある人の配偶者に対する地域住民のパブリックイメージの実態と社会的距離の関連要因を明らかにすることである。まずASDのある人の配偶者を対象に半構造化面接を行い、セルフスティグマの構成概念を探求した。次に、質問紙調査により地域住民を対象にASDのある人の配偶者に対するパブリックイメージの実態と社会的距離の調査を行い1320人から回答を得た。ASDのある人の配偶者に対してパブリックスティグマがあること、パブリックスティグマと社会的距離は関連があること、ASDのある人の配偶者への理解が深まっていない実態が明らかになり、理解を深める必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義として、パブリックイメージの実態を明らかにした点がある。ASD のある人の配偶者は、これまで精神的・身体的・社会的困難を抱えながらも看過され、その実態が明らかにされてこなかった。本研究では、当事者である配偶者がセルフスティグマを内在化させ困難を抱えていたことから、ASD のある人の配偶者に対する地域住民のパブリックイメージの実態を明らかにし、共生しやすい地域生活の障壁となる課題を提起した。
社会的意義として、これまでの研究では当事者や夫婦の関係性に焦点が当てられていたが、本研究で明らかになった結果により社会全体がASDのある人の配偶者への理解を深める必要性が示唆された点がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine the public image and factors associated with the maintenance of social distance from spouses of people with autism spectrum disorder (ASD) among community residents. First, we conducted semi-structured interviews of the spouses of people with ASD to determine the concept of constructing self-stigma. Thereafter, a questionnaire survey was conducted for the community residents about the public image and social distance maintained from spouses of people with ASD. Responses were received from 1,320 subjects. The results revealed the presence of public stigma against spouses of people with ASD. We also found that public stigma and social distance are related and that there is a misunderstanding regarding spouses of people with ASD that suggests the need for a deeper understanding.

研究分野：公衆衛生看護学　学校保健　医療社会学

キーワード：自閉スペクトラム症　結婚　配偶者　パブリックイメージ　地域住民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下 ASD）のある人の特性は、親密な関係性を築くのに困難があると考えられ、ASD のある人の結婚生活には焦点が当てられてこなかった。しかし、近年では彼らの約 1 割が既婚者との報告もある。

先行研究では、ASD のある人の配偶者が結婚生活において精神的・身体的・社会的困難を長期にわたって抱え、周囲に暮らす親戚や友人、専門家から分かってもらえず、理解なき対応に苦しむ様子が報告されている。ASD のある人の配偶者の社会的孤立を防ぐには、地域で暮らす地域住民が ASD のある人の配偶者と出会った時にどのようなイメージを持ちどのように行動するかが重要である。これまで、地域住民を対象に ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージや社会的態度を明らかにした研究はないが、それらが明らかになることにより人々が共生しやすい地域社会を実現するための示唆を得ることができる。

２．研究の目的

本研究の目的は、ASD のある人の妻のセルフスティグマの構成概念をふまえて ASD のある人の配偶者に対する地域住民のパブリックイメージの実態を実証し、社会的距離の関連要因を明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究の研究デザインは、質的研究と量的研究からなる混合研究法の探索的順次デザインである。まず第 1 フェーズでは、質的研究により ASD のある人の配偶者のセルフスティグマの構成概念の探求を行う。次に第 2 フェーズでは、質問紙調査により ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージの実態と社会的距離の関連要因を明らかにする。

（１）第 1 フェーズ　ASD のある人の妻のセルフスティグマの構成概念

ASD の傾向のある人の配偶者 13 名を対象に、半構造化面接を行い、周囲からの否定的まなざしのプロセスを調査した。修正版グラウンデッド・ セオリー・アプローチ（M-GTA）により分析した。

（２）第 2 フェーズ ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージ

地域住民を対象に、ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージの調査を行った。全国の 20 歳～69 歳の男女を対象に、インターネット上で無記名自記式質問紙を配布した。

①　対象者の属性

性別、年齢、学歴等について尋ねた。

②　ASD のある人や家族への社会の理解

調査では、発達障害という用語を使用した。発達障害のある人、発達障害のある人の配偶者それぞれについて、社会の理解が深まっていると思うか、という設問に対し、「深まっていると思う」から「深まっているとは思わない」に「知らない、わからない」を加えた 6 件法で尋ねた。

②　パブリックイメージ

第 1 フェーズで明らかになった ASD のある人の配偶者自身が内在化するセルフスティグマの側面と、先行研究、研究者等による項目内容の検討結果を参考に、ポジティブイメージ 3 項目、パブリックスティグマ 3 項目、家族役割ステレオタイプ 3 項目について「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 4 件法で尋ねた。

③　社会的距離

Link et al.(1999)、望月ら(2008)による先行研究を参考に、ASD のある人の配偶者のビニエットを作成し、「隣近所になる」、「あいさつしたり話したりする」等 6 項目について「受け入れられる」から「受け入れられない」の 4 件法で尋ねた。

（３）倫理的配慮

倫理面に配慮して実施した。研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

（１）ASD のある人の妻のセルフスティグマの構成概念

ASD の傾向のある人の配偶者の周囲からのセルフスティグマのプロセスは、【配偶者の ASD に対する周囲の無理解】ならびに【周囲からの否定的まなざしへの気付き】から始まり、内在化にともない【周囲からの否定的まなざしから生じる悔悟や罪責の念】を抱くようになり、【周囲からの否定的まなざしに由来する行動の自主規制】へと進行していた。【配偶者の ASD に対する周囲の無理解】は、ASD のある人の家族に特有な概念であった。

（２）ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージ

①対象者の属性

20 歳～69 歳の男女 1320 名から回答を得た。年代別には、20 代 220 名（16.7%）、30 代 246 名（18.6%）、40 代 314 名（23.8%）、50 代 268 名（20.3%）、60 代 272 名（20.6%）であり、全国の同年代の人数割合(総務省統計局 2019)と概ね同様であった。性別は、男性 667 名（50.5 名）、女性 653 名（49.5 名）であった。最終学歴については、本研究の回答者は、大学卒業以上が 620 名（49.5%）であり、全国の割合（総務省統計局 2011）よりも大学卒業以上の者が多い傾向にあった。

②ASD のある人やその家族への理解

発達障害のある人に対して、社会の理解が深まっていると感じる人の割合は約 30%であった。発達障害のある人の配偶者への理解が深まっていると感じる人の割合は約 15%に留まった。発達障害のある人やその家族に対する理解を深める必要性が示唆された。

③ASD のある人の配偶者に対するパブリックイメージの実態

ポジティブイメージ、パブリックスティグマ、家族役割ステレオタイプの実態を表 1 に示す。2 割弱が ASD のある人の配偶者に対するパブリックスティグマを抱いていることが明らかになった。しかしその一方で、3 割以上がポジティブイメージを抱いていることも明らかになった。家族役割ステレオタイプは、ASD のある人の配偶者は、配偶者のことを支えなければならない、配偶者としての努力が必要だといった 2 項目では、半数以上がそう思うと回答していた。

表1　発達障害のある人の配偶者に対するパブリックイメージ (n=1320)

	とてもそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	全くそう思わない
	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)
ポジティブイメージ				
魅力的だと思う	61 (4.6)	346 (26.2)	690 (52.3)	223 (16.9)
親しくしたいと思う	47 (3.6)	454 (34.4)	672 (50.9)	147 (11.1)
関わる機会をつくりたいと思う	46 (3.5)	427 (32.3)	697 (52.8)	150 (11.4)
パブリックスティグマ				
関わらないようにする	41 (3.1)	198 (15.0)	661 (50.1)	420 (31.8)
話をするのを避ける	32 (2.4)	185 (14.0)	660 (50.0)	443 (33.6)
親しくつきあうのを避ける	39 (3.0)	230 (17.4)	651 (49.3)	400 (30.3)
家族役割ステレオタイプ				
配偶者を支えなければならない	108 (8.2)	600 (45.5)	463 (35.1)	149 (11.3)
配偶者を選んだ自己責任がある	69 (5.2)	412 (31.2)	570 (43.2)	269 (20.4)
配偶者に合わせなければならない	47 (3.6)	421 (31.9)	636 (48.2)	216 (16.4)
配偶者としての努力が必要だ	97 (7.3)	647 (49.0)	441 (33.4)	135 (10.2)

注)欠損値は除外

③ASD のある人の配偶者に対する社会的距離とその関連要因

社会的距離を従属変数とした一般化線型モデルによる分析を行った。ASD のある人の配偶者に対して、女性より男性の方が社会的距離が大きかった。また、年齢が高いほど社会的距離が大きかった。ポジティブイメージを持たないほど、パブリックスティグマがあるほど、家族役割ステレオタイプがないほど ASD のある人の配偶者に対する社会的距離は大きかった。

発達障害のある人と関わった経験別には、テレビやインターネットで発達障害のある人を実際に見たことがある人の方が社会的距離が小さかった。

表2 社会的距離に関連する要因

		社会的距離				
		2変量			多変量	
		平均	SD	p	β	p
性別[a)]	(男)	13.5	4.4	***	1.122	***
	(女)	12.1	4.1		ref.	
年齢[b)]		r= .121		***	.024	*
パブリックイメージ						
ポジティブイメージ[b)]	(なし)	r= .281		***	.510	***
パブリックスティグマ[b)]	(良い)	r=-.288		***	-.541	***
家族役割ステレオタイプ[b)]	(良い)	r= .052		*	.252	***
発達障害のある人との関わった経験の有無						
テレビやインターネットで見たことがある[a)]	(あり)	12.3	4.1	***	1.637	***
	(なし)	14.7	4.5			
発達障害のある人のことを学んだ経験がある[a)]	(あり)	12.2	4.2	***	.046	n.s.
	(なし)	13.2	4.3			

注1) 調整変数：学歴 ,就労, 婚姻, 配偶者発達障害の有無
注2) 欠損値は除外
注3) 2変量の検定は、a)t検定、b)Spearmanの相関による
注4) * $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$
注5) n.s.:not significant
注6) 社会的距離：得点が高いほど社会的距離が大きいことを示す

（引用文献）

Link, B. G., Phelan, J. C., Bresnahan, M., Stueve, A., & Pescosolido, B. A. (1999). Public conceptions of mental illness: labels, causes, dangerousness, and social distance. American journal of public health, 89(9), 1328-1333.

望月美栄子ら. (2008). こころの病をもつ人々への地域住民のスティグマおよび社会的態度-全国サンプル調査から. 厚生の指標, 55(15), 6-12.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 出口 奈緒子,朝倉隆司
２．発表標題 自閉スペクトラム症の特徴のある夫の妻が周囲の無理解に気付いてから周囲からの否定的まなざしを内在化する過程
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口 奈緒子
２．発表標題 発達障害のある子どもとその家族に対するダイバーシティーエフィカシーを高めるための多職種連携教育に向けた基礎的検討
３．学会等名 日本養護教諭教育学会 第27回学術集会　誌上発表
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口 奈緒子,朝倉　隆司,大宮朋子
２．発表標題 自閉スペクトラム症傾向のある人の配偶者のセルフスティグマ尺度の開発および信頼性と妥当性の検討
３．学会等名 日本学校保健学会第66回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 出口 奈緒子
２．発表標題 自閉スペクトラム症の特徴のある夫の妻のセルフスティグマ
３．学会等名 2019年度 広域科学教育学会大会研究発表
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoko Deguchi　,Takashi Asakura ,Tomoko Omiya
２．発表標題 Family self-stigma and its association with hope among spouses of individuals with autism spectrum condition in Japan
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science 誌上発表（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 出口　奈緒子、朝倉　隆司、大宮　朋子
２．発表標題 自閉スペクトラム症傾向のある夫を持つ妻が内在化する 否定的まなざし―混合研究法による検討―
３．学会等名 日本学校保健学会第65回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 出口　奈緒子、朝倉　隆司、大宮　朋子
２．発表標題 Autism Spectrum Conditionのある夫を持つ妻が 否定的なまなざしを内在化するプロセス
３．学会等名 日本発達心理学会 第30回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考